

地蔵浄土

語り手…前田トメさん（御波、大正3年生まれ）

とんと昔があっただけな。

昔々、じいさんとばあさんがいい陽よりのおり、木こりに行きたげな。昼飯のおりに焼き飯をいっ
と(たくさん)持っって、二人で食べたげな。そげしちよつたら、一つ余って、
「じいさん、おまえ食わっしゃい」「ばあさん、おまえ食ええ」ちゅうやあなことで、二人で譲り合っ
ちよつたとこめがけえ、焼き飯がコロコロ手から漏れて下の方へ転んで行きたげな。そつから、ば
あさんが、一やれ、くちよし(口惜しい)や、焼き飯が転んで行きたげな一 思って、後からごそご
そさげえて(捜して)行きた。そこにはお地蔵さんがおったげな。

「地蔵さん、地蔵さん。この方へでも焼き飯がまくれてけえさったかの」言つたら、
「来たこと来ただいで、下の方へはねて(放して)やっただわい」言つたげな。

またどんどんどんどん、下の方へ行つたら、また地蔵さんがおったげな。

「地蔵さん、地蔵さん。この方へでも焼き飯がまくれてけえさったかの」てて言つたちゅうわい。
そしたら、「焼き飯はまくれて来ただいで、下の方へはねて(放して)やっただわい。そつだだいで、
下の方までさげえて(捜して)行くな。下には恐ろし赤鬼や白鬼がおってけ、恐ろしことだ
けん、その焼き飯ほしさに、そげなとこ行くだねえわい」てて言つたちゅうに、ばあさんはどげ
言つたててこたえんだけん、

「おつてもいいわ」言つて行きたげな。

ところが、地蔵さんが言つたとおり、赤鬼や白
鬼がいっぱいおつて、

「やれこら、ばばが一人来たわい。まま炊きばば
にちょうどいいわい」ちゅう細工で、そつから、
わつわり出る鬼おんに、そのばあさんに言うことにゃ、
「ここにな、米粒三粒と小豆三粒あつけん、ここ
に金の杓子(しゃくし=しゃもじ)があつけん、こ
こで混ぜくら、この大きな羽釜おんにいっぱい
なつけん、炊けよ」言つたちゅうわい。

そつか、ばあさんが、

「ほん(本当)だらか」言つて、水いっぺ入れて、
その羽釜おんに三粒の米と小豆入れて金の杓子

で混ぜくつたら、本当に鬼が言つた通りに羽釜おんにいっぺの飯おんになつたちゅうわい。

一こら、まあ、不思議な杓子もあつたもんだ。いっその鬼のおらん間おんに、こいつ一つ盗んでいにゃ、こげな重宝なもん
はあれしえんに一 思って、一鬼のおらん間おんを、いつか、いつか一 思ってうかがつたちゅうわい。

あるおりに、鬼のおらん間おんに、け、その杓子をけ、そつと盗つてもどつたちゅうわい。そつか、わがとけいんで、そげし
て混ぜくつてみたら、たつた三粒の米が羽釜おんにいっぺになつたけん、そつが地下中ちげのもん皆呼んで、祝いして、そこは
大きな長者になつた。

そつばかりの昔だわな。

■収録:昭和 52 年 4 月 30 日

■聞き手:宇野多恵子、上田和代、吉本千恵子、酒井董美

隠岐島前高校郷土部収録 海士町の民話から (29)

■再話・解説

酒井董美 ただよし

(山陰民俗学会会長、元隠岐島前高校郷土部顧問)



イラスト/福本隆男(崎出身、三郷市在住)

【解説】関 敬吾『日本昔話大成』では本格昔話「隣の爺」の中に「地蔵浄土」として登録されているが、それでは隣人が真似て失敗する話になっている。前田さんの話ではその部分が省略されているのである。それが地方色と言えるのであろう。